

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：30110

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530913

研究課題名(和文)地域の偏りが生じない高校生コミュニケーション教育プログラムの開発

研究課題名(英文)The development of a communication skills program for high school without unfairness of regional trait

研究代表者

富家 直明(TOMIIE, Tadaaki)

北海道医療大学・私立大学の部局等・教授

研究者番号：50336286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：児童・生徒のメンタルヘルスとコミュニケーションスキルに注目した。本研究では、コミュニケーションスキルとメンタルヘルスの関係を地域別に明らかにする調査、小学校から高校まで縦断的に利用できるコミュニケーションスキル尺度の開発、同尺度の利用方法に関する研究、の3つを実施した。地方の方が都市部より抑うつ得点が高く、スキルの意見の表明と好意表現の2つは地方において低かった。スキルは行動活性化変数を媒介して抑うつを説明できることがわかった。小学校から高校生まで縦断的にコミュニケーションスキルを測定できる5つの尺度を開発し、北海道教育委員会と協働して北海道内の公立学校に無償提供された。

研究成果の概要(英文)：Recently there are growing interests in child mental health and communication skills. We performed the following three researches.(1) Investigation which clarifies relation between communication skill and mental health for each area.(2) Development of the communication skill measure which can be used in each 5 section from an elementary school to a high school.(3) Public presentation of a communication education tool which utilized the above-mentioned 5 measure and the challenge of an experimental intervention study for a few schools.We got several conclusions. The child who resides in rural areas has a depression score higher than the child in urban areas. About the skill of expression of an opinion, and good will expression, the children who reside in rural areas were lower than in urban areas. We created the model social skill explains depression to be via a behavioral activation variable. Five communication skill measures were established for user available.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学

キーワード：地域援助 コミュニケーションスキル 抑うつ

1. 研究開始当初の背景

子どもたちの抑うつ増加が懸念されている。傳田(2003)は札幌近郊の小中学生にうつ病評価尺度を施行し、小学生13%、中学生22.8%がうつ傾向にあること、構造化面接の結果では小学生1.5%、中学生4.1%がうつ病に罹患していることを明らかにした。うつは意欲の低下や社会的交流を弱体化させる要因にもなりうる。平成19年に発表された新潟県教育委員会による中1ギャップ調査によれば、小学校6年生から中学校1年生にかけておよそ5倍のいじめと2.5倍の不登校の増加がみられ、その原因に自己肯定感とコミュニケーションスキルの弱さが認められるという(新潟県教育委員会,2008)。あわせて高校1年時に不登校から中途退学をきたす高1クライシス現象にも注目が集まった。北海道では高校中退の60%が高1に集中発生しており、解決が強く期待されている。地方の地域復興に社会的スキル訓練を実施したBotha,U.A. et al.(2010)によれば、コミュニケーションスキル教育は単なる個人のコミュニケーション力を高めるだけでなく、自己肯定感の向上や抑うつの防止、さらには社会的ネットワークの強化にまで好影響を及ぼす地域活性化の起爆剤になる可能性を持つことを示唆した。

研究代表者らは行動活性化の理論を社会的スキル訓練に取り入れることによって、高校生の抑うつ・無気力による不登校や中途退学を防止できると着想し、以下の研究を行った。

2. 研究の目的

)コミュニケーションスキル、行動活性化、抑うつの関連性を地域層別抽出法とマルチレベル分析を用いてモデル化した『スキル活性化モデル』を完成させ、適合性の検証を行う。

)縦断観測に耐える小学校低・中・高学

年版、中学校版、高校生版コミュニケーションスキル尺度を新たに完成させる。

)同尺度の公開とコミュニケーション教育のためのアウトリーチ活動、児童生徒のストレス疾患、生活習慣病に関する調査を行う。

3. 各研究の方法

)スキル活性化モデルの作成

層化二段無作為抽出法を用いて抽出された北海道の高等学校に在籍する1年生から3年生までの学生1567名を対象に調査を実施し有効回答者数合計1493名を分析対象とした。

BADS 尺度(25項目,7件法):Behavioral Activation for Depression Scale(BADS)の日本語版。

K6 質問票日本語版(6項目,5件法):Kessler et al. 2002により作成された6項目からなる気分・不安障害のスクリーニング尺度の日本語版。

高校生用主張性尺度(高木・富家,2002)(25項目,6件法):7因子構造(対人不安・緊張の低さ,意見の表明,積極的対人参入,上手な抗議,相手への配慮,好意表現,親への過剰な気遣いの低さ)の尺度。

調査は学級単位で授業時間などに集団で実施された。北海道医療大学の倫理委員会の許可を得た。

地域部と都市部および抑うつの高群と低群の差を検討するためにt検定を行なった。また、高校生のソーシャルスキルと活動性が抑うつに与える影響を検討するために共分散構造分析を行なった。

)小学校低・中・高学年、中学校、高校生版コミュニケーションスキル尺度開発

先行研究で扱われた社会的スキルの構成要素を網羅的に検討し、抽出された13カテゴリに対応する形で「学校生活に適應していると考えられる具体的な子どもの様子」を小中高教諭によるブレインストーミングから

項目を収集した。予備調査で作成された低学年版 15 項目，中学年版 19 項目，高学年版 20 項目からなる自記式尺度（4 件法）を用いて 小学校 47 校 5921 名（低学年 1864 名，中学年 1936 名，高学年 2085 名）を対象に調査を実施した。統計解析には項目反応理論（IRT）を用いた。本研究は北海道医療大学倫理委員会の承認後，北海道教育委員会との共同研究として実施された。

）同尺度の公開とアウトリーチ活動、健康調査

北海道教育委員会と共同作成したコミュニケーションスキル尺度はほっとという愛称で道内の学校関係者に公開された。全道において説明会が開催され、DVD で専用ソフトが配布された。コミュニケーション教育のアウトリーチ活動として、北海道教育委員会が主催する高 1 クライシス予防のための事業に参加し、高校定時制においてコミュニケーション教育を行った。コミュニケーションに関する心理教育をテーマにした映画撮影を行うことし、その実施経過の中で構成的グループエンカウンター等を配置した。脚本の内容は高校生の実生活を反映して、部活場面、教室場面、恋人場面、アルバイト場面、家庭場面でのコミュニケーションの問題を取り上げた。主人公は自らの考え方のクセ（部分的焦点づけ、レッテル張り）に気づき、怒りの対処法、アサーティブな自己表現を学び、上手なコミュニケーションの方法を身につけていくという内容であった。コミュニケーション教育の効果測定であるが、中途退学率、副次的評価項目は 高校生用主張性尺度（高木・富家，2004）：7 因子 25 項目，東大式エゴグラム（末松他，1993）：5 因子 50 項目を使用した。質問紙の測定時期は X 年 4 月および X+1 年 2 月であった。

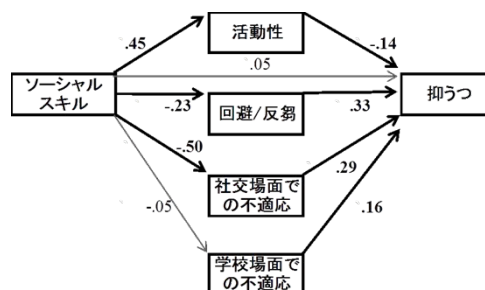
また、上記の研究とは別に、思春期を対象とした過敏性腸症候群、肥満、ストレス疾患などに関する調査研究を行った。特に、スト

レス疾患に悩む児童生徒が多いことから、過敏性腸症候群に特化した心理尺度の開発を行った。アメリカの Visceral sensitivity index を邦訳しバックトランスレーションをおこない、日本版の尺度開発を行った。

4 . 各研究の成果

）スキル活性化モデルの作成

K6、意見の表明、好意表現の 3 指標で地域間差が見られ、いずれも地方部在住者の数値が悪かった。また SEM によるモデル作成の結果、次図のような適合度の良好なモデルが完成した（RMSEA0.083, CFI0.631, AGFI0.66）。



）小学校低・中・高学年、中学校、高校生版コミュニケーションスキル尺度開発

polyserial 相関分析，カテゴリカル因子分析の結果，いずれの尺度でも「緊張」に該当する項目を除いて一次元性が確認されたため，当該項目を除外後，残存項目の困難度と識別力を算出した。本研究の結果，小学校低学年では「発言や説明」「助言や注意」など意見表明に関するスキル，中学年では「思いやり」「リーダーシップ」など集団形成に関するスキル，高学年では「学業」「相談」など問題解決に関するスキル，中学校では「リーダーシップ」「助言や注意」など集団の動機づけを高めるスキル，高等学校では「自律」「発言や説明」などセルフコントロールに関するスキルが比較的課題となりやすいことが明らかとなった。最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を実施し，スクリープロットの減衰状況から固有値 1 以

上となる多因子解を採用した結果、小学校低学年版では3因子、中学年版では2因子、高学年版では4因子、中学校版では4因子、高校版では5因子がそれぞれ抽出された。本研究にて示された尺度の因子構造は、発達に応じた社会的スキルの多様化を表していると考えられ、SSEにおけるターゲットスキルの効果的な配置に役立つことが期待される。次図に中学校版の項目例を挙げる。

項目	分類
1 誰にでも自分からあいさつをすることができる。	挨拶や感謝
2 感謝の気持ちを伝えることができる。	挨拶や感謝
3 少数意見であっても、自分の考えをしっかりと言うことができる。	発言や説明
4 場面や状況を考えて、相手に伝わるように発言できる。	発言や説明
5 積極的に集団活動に参加できる。	仲間づくり
6 共通の目標に向かって、みんなと協力することができる。	仲間づくり
7 困っている人を助けることができる。	思いやり
8 危険なことに誘われても、断ることができる。	拒否
*9 友達にどう思われるか不安で、本音を話すことができない。	緊張
*10 緊張して人前で話すことができないことがある。	緊張
11 がんばっている友達を励ましたりほめたりすることができる。	賞賛
12 学校のきまりやルールを守ることができる。	ルールやモラル
13 みんなのやる気を高める発言をすることができる。	助言や注意
14 まわりに迷惑をかける人に注意することができる。	助言や注意
15 注意されたときなどに、嫌な気持ちを態度に出さない。	自律
16 休み時間中に次の授業の準備ができる。	学業
17 友達同士で協力し合って学習することができる。	学業
18 司会や班長として、具体的に指示を出したり、意見をまとめたりするリーダーシップ ことができる。	リーダーシップ
19 クラスのことを考えて行動することができる。	リーダーシップ
20 困ったことや悩みを先生や友達に相談することができる。	相談
21 自分の性格や趣味などを友達に話すことができる。	相談

）同尺度の公開とアウトリーチ活動、健康調査

コミュニケーション教育の効果は、対象となった高校1年生の中途退学率は前年度との比較で13% (28%から16%に)減少した。対応のあるt検定の結果、主張性尺度の「意見の表明」($t(30) = -2.45, p = .020$)、エゴグラムの「CP」($t(30) = -3.00, p = .005$)に得点の上昇がみられた。一方、主張性尺度の「相手への配慮」では得点が低下した($t(30) = 3.77, p = .001$)。映画制作に参加した生徒からは「人と触れ合うことが苦手だったが、会話が楽しくなった」「定時制で一つになって協力できたのは良い経験だった」「学校全体が仲良くなった」「表情が豊かになったと家族に言われた」などの声が聞かれた。教員からも「生徒の隠れた才能が見えた」と好評であった。本取組は定時制高校での高1クライシスの予防において一定の効果があると考えられた。

IBSの尺度開発では、857名の大学生を対象にvisceral sensitivity indexの仮尺度を実施したところ、オリジナル版と同様の1因子、15項目の因子構造であることが分かった。さらに、日本語版尺度の内的整合性、構成概念妥当性、弁別的妥当性、増分妥当性の統計値は、いずれも高値を示した。本研究により、日本語版visceral sensitivity indexが高い信頼性を有することが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

Saigo, T., Tayama, J., Hamaguchi, T., Naoki Nakaya, Tomie, T., Peter J Bernick, P.J., et al. 2014 Gastrointestinal specific anxiety in irritable bowel syndrome: validation of the Japanese version of the visceral sensitivity index for university students. Biopsychosoc Med. 8 / (Japanese Society of Psychosomatic Medicine) / [Epub ahead of print]

富家直明・大野史博 2013 ICTと低強度認知行動療法を用いた震災学校メンタルヘルス支援活動に関する報告. 北海道医療大学心理科学部紀要, 9, 31-37.

Tayama, J., Nakaya, N., Hamaguchi, T., Tomie, T., et al. 2012 Effects of personality traits on the manifestations of irritable bowel syndrome. Biopsychosoc Med. 6 / (Japanese Society of Psychosomatic Medicine) / [Epub ahead of print]

〔学会発表〕(計21件)

Ohkubo, M., Shinakawa, H., Tayama, J., Hamaguchi, T., Tomie, T., 2013 Menstrual cycle phase-related change in depressive mood, attentional and

cognitive function in woman with PMDD. The 22th World Congress on Psychosomatic Medicine, Lisbon, Portugal

Shinkawa, H., Haga, M., Nishiduka, T., Tomiie, T. 2013 The interaction effects between social skills and behavioral activation on social impairment in adolescents with depressive symptoms. The 4th Asian Cognitive Behavioral Therapy Conference Abstract book, 39.

Nishiduka, T., Shinkawa, H., Tayama, J., Hamaguchi, T., Asahi, M., Tomiie, T. 2013 The effective types of disproof and balanced thoughts during cognitive reconstruction method on mood improvement. The 22nd World Congress on Psychosomatic Medicine Abstract book, 51.

田山 淳・山崎浩則・中垣内真樹・篠崎彰子・阿比留教生・川上 純・村椿智彦・新川広樹・富家直明・坂野雄二・福土 審・調 漸 2013 メタボリックシンドロームを対象にした集団認知行動療法の効果 日本糖尿病学会第 56 回大会発表

西塚拓海・新川広樹・富家直明・田山 淳・濱口豊太 2013 反証と適応的思考の思考カテゴリー分類の試み 日本行動医学会第 19 回大会発表論文集, 99 .

新川広樹・富家直明・田山 淳 2013 社会的スキル尺度の因子構造の発達の变化 日本教育心理学会第 55 回大会発表論文集, 333 .

富家直明・新川広樹・田山 淳 2013 定時制高校における映画制作活動を通じたソーシャルスキル教育の試み 日本カウンセリング学会第 46 回大会発表論文集, 112 .

Ogawa, S., Yamasaki, H., Saigo, T., Hattori, T., Tomiie, T., Hamaguchi, T., Shirabe, S., Munakata, M., Tayama, J. 2013 The relationship between Type A behavior pattern and obesity in

Japanese workers.

The 22th World Congress on Psychosomatic Medicine, Lisbon, Portugal

田山 淳・山崎浩則・中垣内真樹・篠崎彰子・新川広樹・富家直明・調 漸 2012 メタボリックシンドローム患者に対する集団認知行動療法の効果 生活習慣病認知行動療法研究会第 7 回大会発表論文集, 15 .

小川さやか・田山 淳・西郷達雄・新川広樹・富家直明 2012 勤労者におけるタイプ A 行動パターンと生活習慣病(1)—肥満の形成に関連する要因の検討— 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 1210 .

田山 淳・小川さやか・西郷達雄・新川広樹・富家直明 2012 勤労者におけるタイプ A 行動パターンと生活習慣病(2)—肥満の形成に関連する要因の検討— 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 1211 .

新川広樹・富家直明・田山 淳 2012 児童生徒の発達段階に応じた社会的スキルを測定する尺度の作成(1)—小学校低学年・中学年・高学年の生徒指導に向けて— 日本教育心理学会第 54 回大会発表論文集, 753 .

富家直明・新川広樹・田山 淳 2012 児童生徒の発達段階に応じた社会的スキルを測定する尺度の作成(2)—中学校・高等学校の生徒指導に向けて— 日本教育心理学会第 54 回大会発表論文集, 754 .

Shinkawa, H., Tomiie, T., Muratsubaki, T., Tayama, J., Kanazawa, J., Hamaguchi, T., Fukudo, S., & Sakano, Y. 2011 The effect of irrational dieting beliefs on abnormal eating behavior and obesity in Japanese university students. The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine Abstract book, 183.

Saigo, T., Tayama, T., Yamasaki, H., Ogawa, S., Tomiie, T., Shinkawa, H., Hamaguchi, T., Tamai, M., Hayashida, M.,

Sakano, Y., Fukudo, S., & Shirabe, S. 2011 Development of the eating behavior scale for college students. The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine Abstract book, 183.

Tayama, T., Saigo, T., Yamasaki, H., Ogawa, S., Tomiie, T., Muratsubaki, T., Shinkawa, H., Hamaguchi, T., Tamai, M., Hayashida, M., Sakano, Y., Fukudo, S., & Shirabe, S. 2011 Personality associated with obesity-specific abnormal eating behavior in Japanese college students. The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine Abstract book, 182.

新川広樹・富家直明・田山 淳・村椿智彦・濱口豊太・福土 審・坂野雄二 2011 Irrational Dieting Beliefs Scale の因子構造と肥満に関する認知行動モデルの検証 日本行動医学会第 17 回大会発表論文集, 55 .

新川広樹・富家直明・村椿智彦・田山 淳・濱口豊太・福土 審・坂野雄二 2011 Irrational Dieting Beliefs Scale の開発および信頼性・妥当性の検証 日本心身医学会第 52 回大会発表論文集, 112 .

新川広樹・前川豊志・富家直明 2011 小中移行期における学校適応感の差および階層構造の検証 日本教育心理学会第 53 回大会発表論文集, 462 .

芳賀道匡・小幡昌志・健名宏樹・新川広樹・富家直明 2011 高校生の抑うつ症状とソーシャル・キャピタル, ソーシャル・スキルの関連性の検討～地方部—都市部間比較に焦点を当てて～ 日本教育心理学会第 53 回大会発表論文集, 485 .

②新川広樹・富家直明・村椿智彦・田山 淳・坂野雄二 2011 食行動異常の測定領域から見た IDBS の構成概念 日本行動療法学会第 37 回大会発表論文集, 252-253 .

{図書}(計 1 件)

岡昌之、妙木浩之、生田倫子、富家直明、

花田里欧子、三澤文紀、新曜社、心理療法の交差点 精神分析・認知行動療法・家族療法・ナラティブセラピー、2013、293

6 . 研究組織

(1)研究代表者

富家直明 (TOMIIE, Tadaaki)

北海道医療大学・心理科学部・教授

研究者番号 : 50336286

(2)研究分担者

小川(濱口)豊太 (HAMAGUCHI.Toyohiro)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号 : 80296186

田山 淳 (TAYAMA.Jun)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号 : 80296186